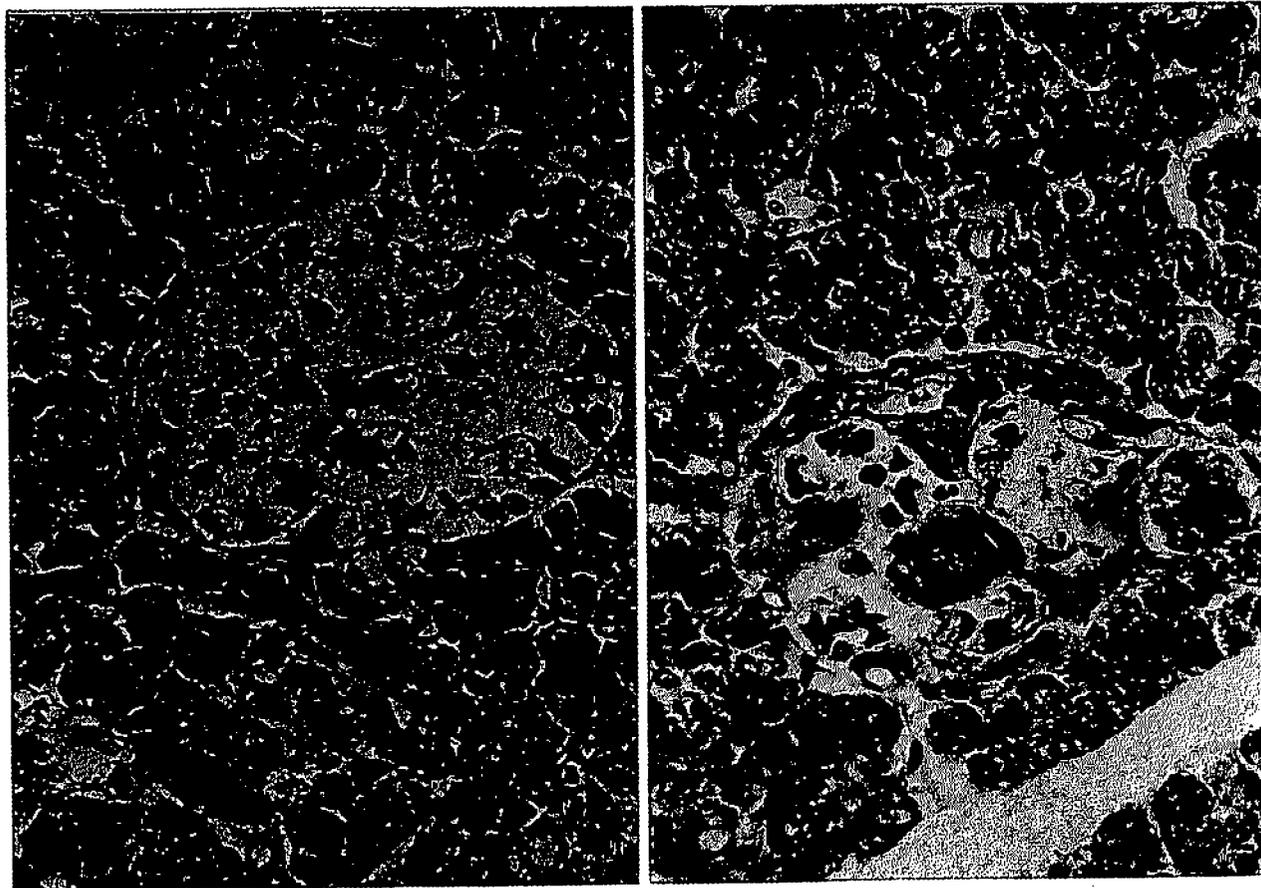


ネコの糖尿病の膵

岐阜大学農学部家畜病理学教室出題

第18回獣医病理学研修会標本No.284



動物：ネコ，去勢，9才

臨床的事項：昭和52年8月26日上診。当時、体温38.5℃、元気はあるが肥満体で、食欲に「むら」があり、旺盛な飲水欲が目をはく。同年8月28日には元気消失し、食慾も廃絶する。翌29日も同症状。8月30日に、尿検査を行い、pH=6、タン白(+)、糖(+++)、ケトン体(+++)、Hb(+)、比重1.038、糖尿病を疑い治療を始める。同年9月1日には、起立を嫌い、腹臥を好む。午後から横臥し、飲水欲も全廃する。呼吸浅く、心拍も弱い。尿検査は、pH=5、タン白(++)、糖(++)、ケトン体(++)、Hb(-)。午後10時頃昏睡に陥る。同年9月2日午前4時頃、大きな鳴声とともに嘔吐が始り、30分に1回くらいの割合が序々に短時間に嘔吐をくり返すようになり、午前6時頃斃死。

剖検所見：ホルマリンに固定された膵臓の一部だけが送付されてきたので、肉眼所見は不明。

膵臓の組織所見：ヘマトキシリン・エオシン染色（以下H・E染色と略）標本において、ランゲルハンス島（以下ラ島と略）の数の減少はなきさうに見える。しかし、全ての視野において、個々のラ島の構成細胞は著明に消

失し、島内に撒種されたように、わずかに残存するラ島細胞も、凡そ全てが膨化し、あるいは萎縮に陥る。同時に硝子様物質の沈着が主としてラ島内の辺縁域にみられる（Fig.1, H-E染色, X134）。Alcian blue, PAS, Masson 重染色で、これらのラ島内の残存細胞は、β細胞顆粒を示す濃い空色も、PAS染色にも染まらず、β細胞の略々完全な脱落を知ることができる。同時にα細胞も概ね変性過程にあることがうかがわれる（Fig.2, Alcian blue, PAS, Masson 重染色, X134）。Aldehyde fuchsin (Gomori) 染色でも、紫色に染め出されるβ細胞は見あたらない。すでに述べたラ島内に沈着する硝子様物質は、ラ島細胞の崩壊の強さに比例して増加し、Alcian blue, PAS, Masson 重染色で空色に、Aldehyde fuchsin 染色で淡紫色に染まるが、Congo red染色では、染まらず、これをアミロイドとは見なしえなかった。

診断：「ネコの糖尿病の膵」と診断された。なお、ラ島内の硝子様物質はアミロイドでない。硝子様物質の沈着が先で、ラ島細胞の脱落がその後ではないか等々の意見が出された。